

生活文化常任委員会行政視察概要

令和7年8月6日（水）

於 第 2 委 員 会 室

午前10時00分～午前11時30分

1 調査概要

「ごみ減量の取組について」「ゼロカーボンの取組について」

相模原市 環境経済局 資源循環推進課 ごみ減量PR室

相模原市 環境経済局 ゼロカーボン推進課

相模原市には、一般廃棄物処理施設が4つあり、今後、各処理施設の整備等が予定されていることから多額の費用が見込まれており、各処理施設の延命化を図るため、3Rに1R（リフューズ）を加えた4Rを推進している。4Rに関する情報発信として、幼稚園や小学校への出前講座や地域のイベントへの出席等を現在に至るまで約15年継続しており、さらに、YouTube「ごみ減量PR室チャンネル」を開設し、視聴者が分かりやすく、理解しやすい1分間のショート動画作成を市職員が実施しているとのことであった。

さらに、官民連携事業として、全国初となるジモティーとブックオフとの三者協定を締結し、家庭で不要となった家電や衣類等の物品をジモティーが引き取り、市内で販売又は無償譲渡し、それでもリユースに至らなかった物品をブックオフが引き取り、同社がマレーシアやカザフスタン等の海外で展開する「Jalan Jalan Japan」にて販売するという「リユースの輪」を構築している。

また、ゼロカーボンの取組の1つとして、学校施設への太陽光発電設備の設置や新築建築物のZEB化、LED照明、次世代自動車（電気自動車など）の導入等を推進している。さらに、世界初の試みとなる「次世代型太陽電池『カルコパイルイト』」を自動販売機に搭載する実証実験を複数の民間

事業者と連携して実施しており、脱炭素社会の実現に向けた取組を推進している。

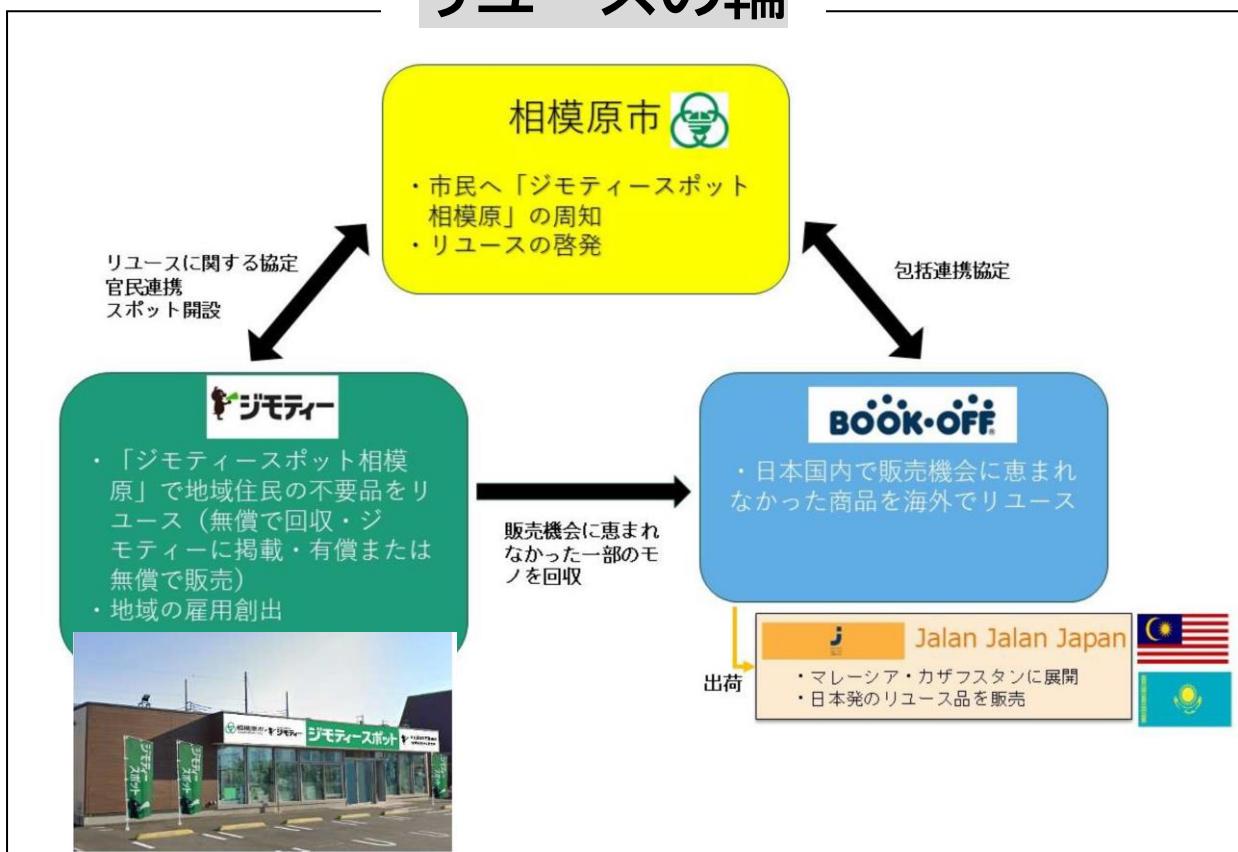


YouTubeによる動画配信

 <p>YouTubeチャンネル <u>「ごみ減量PR室」</u></p>	<p>祝!開店「ジモティー スポット相模原」と市長</p> <p></p>	<p>相模原市の最終処分場の (埋立地)の歴史</p> <p></p>
	<p>相模原市が「4R」を PRします</p> <p></p>	<p>「分別釣りゲーム」が相模原 市内のお祭りに登場!</p> <p></p>

出典) 観察当日に相模原市が配布した資料から抜粋

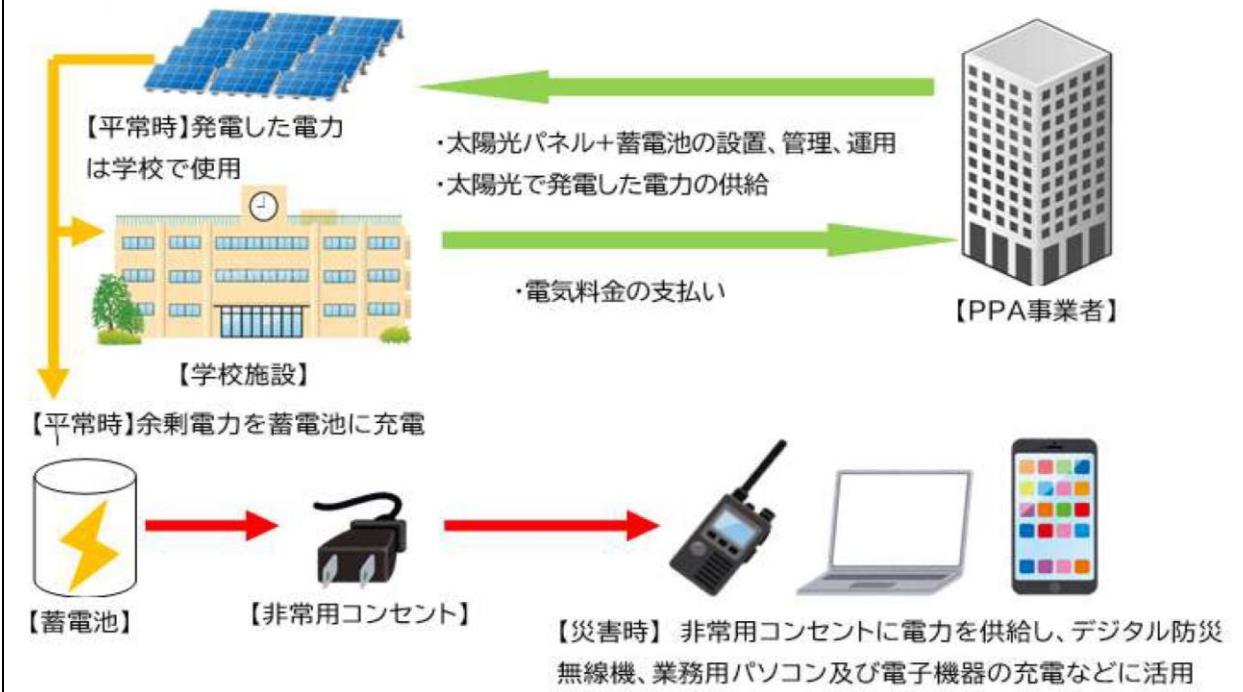
リユースの輪



出典) 相模原市HP 発表資料 (<https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/shisei/1026875/koho/1026878/houdou/index.html>)

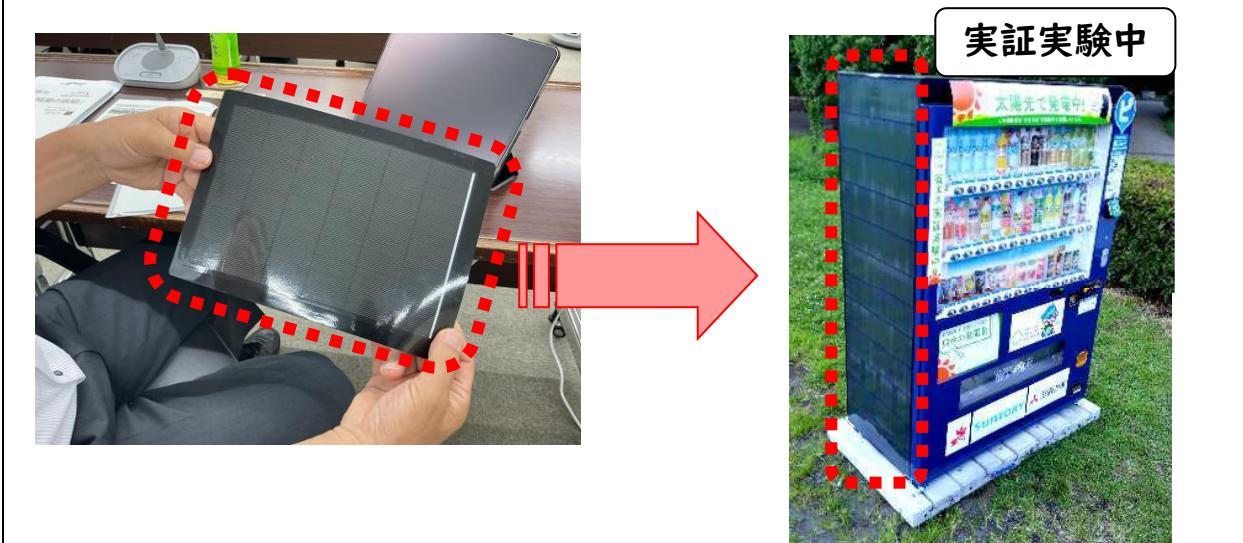
- ▶ 令和 7 年 7 月 2 日 (https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_001/033/351/0702/06.pdf)
- ▶ 〃 3 月 13 日 (https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_001/032/540/0313/02.pdf)

学校施設への太陽光発電設備導入事業



出典) 相模原市HP (<https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/kurashi/1026489/1026502/1027883/1030459.html>)

次世代型太陽電池『カルコパイライト』



出典) 【左】 観察当日に相模原市が提示されたカルコパイライト (サンプル)

【右】 相模原市HP 発表資料 (<https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/shisei/1026875/koho/1026878/houdou/index.html>)

- ▶ 令和7年 7月24日 (https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_001/033/351/0724/02.pdf)
- ▶ " 3月 3日 (https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_001/032/540/0303/01.pdf)

2 主な質疑応答

(1) ごみ減量の取組について

問1 4Rの情報発信の取組の1つである「幼稚園・小学校等への出前講座」は、誰が発案したのか。

答1 現場の作業員から意見をいただいた。日頃からごみ出しのルールが守られていなかつたり、子供達がごみ収集車を好きで追いかけているような光景を目にしていたことがきっかけで、現場の収集作業員と一緒に検討し、本出前講座が始まった。出前講座の中では、実際にごみ収集車へごみ袋を投入する作業体験も行っている。本出前講座を通じて、過去に講座を受けた子供が大人になり、自分の子へ伝えていく世代間のつながりを実感した。

問2 現場の作業員の意識改革等はどのように進めてきたのか。

答2 現場の作業員について、以前は収集作業も担っていたが、最初は啓発事業のみに専念してもらっている。年々若い作業員も増えてきており、収集するだけでは分からぬ面を、子供たちと接して色々な質問を受けることにより気づきを得て、収集作業に生かしていくローテーションが現場等からとても好評であり、意識向上につながっていると感じる。

問3 ジモティーやブックオフとの連携事業を始めるきっかけとなった最初の声掛けは市からだったのか。それとも事業者からだったのか。

答3 事業者からお声掛けいただいた。市と連携協定を締結することは事業者にとって大きなメリットがあると考えられている。この度の事業内容については、連携協定を締結した後に、市と事業者が共同で検討した。

問4 ジモティーやブックオフ以外の業者にも同事業をしてもらうようなことは検討したのか。

答4 特に検討しなかった。あまり色々な方面で事業を広げてしまうと、なかなか收拾がつかなくなってしまう恐れがあると思われる。まずはジモティーとブックオフ、そして相模原市の三者連携を核として事業を進めていきたいと考えている。なお、ジモティースポットだけでいうと、月約30tのごみ減量を実現することができた。

問5 ジモティースポットを展開している中で、現状感じている課題や今後の対応策等について教えてほしい。

答5 現状は相模原市中央区で1店舗のみであり、相模原市は市内3区で広い面積であることから、今後は各区にジモティースポットを出店してもらいたいと考えている。特に、緑区は中間山間地域となっており、高齢者等がジモティースポットに向かうのが困難であることが予想されるため、現在、宅急便業者等と協議を進めており、将来的にはジモティースポットまで行かなくても、宅急便業者等がジモティースポットへ配送する等の体制が構築できれば良いと考えている。

問6 説明された内容以外で、他にどのようなごみ減量の取組をされてきたのか。

答6 容器包装プラの分別収集を始めたのがスタート。市民生活の多様化等に伴い、ごみの組成も変わっていき、プラスチックごみも増えてきたことから、そのような分別収集で資源化できたのは大きい点だと感じている。次に、市民に対して市内に最終処分場があるという情報発信を行い、ごみ減量に関する意識啓発に取り組んできた。また、子供達に対して、ごみ分別等の大切さ等を訴えてきた。そして、南清掃工場（ごみ処理施設）の建て替えを実施したことにより、焼却灰の中のスラグ（コンクリートの原材料等、再利用できるもの）を生成できる施設整備に取り組んできた。

問7 ごみ処理施設の今後について、どのように考えているのか。

答7 南清掃工場は整備が完了したものの、北清掃工場の老朽化が進んでおり、あと5年ほどで建て替えを予定している。相模原市は政令指定都市ということもあり、他市町村で災害が発生した場合や過去に他市町村でリチウムイオン電池が爆発して一時的にごみ処理施設が使用できなくなった事例等があることから、そのような事態が発生した場合に他市町村からのごみ搬入を受け入れられるようにするため、ごみ処理施設の規模縮小等は検討していない。

(2) ゼロカーボンの取組について

問8 カルコパイライトは、事業者からのPRがあつて導入したのか。

答8 さがみはら産業創造センター（通称：SIC）という市や商工会議所等が起業家やベンチャー企業等を支援する施設が元々あり、そのような繋がりから、カルコパイライト導入の話が進んだ。相模原市としては、積極的に連携協定を締結して、市と事業者の両者にメリットがある形で事業を進めている事例は多いと感じている。（例えば、実証実験1つ実施するのにも費用は少なからず発生するものではあるが、実証実験の場として市の公共施設を無償で提供すればメリットがある 等）

問9 例えば、中小企業だと連携事業を進めるにあたり負担に思われるようなこともると感じるが、そのような事業者へ提示する具体的なメリットは何か。

答9 相模原市としても非常に重要な課題だと感じている。市が補助メニューを用意しているとはいっても、実情は、事業者がその事業にかける労力・費用等の余力がないことがある。例えば、業界全体の仕組みの中で、そのような事業への取組が必須になってくるようなサプライチェーンの構築が必要だと感じている。

その中で、そのような取組をしている事業者を市がイベントやHP、SNS等でPRしていくことで、それを見た他事業者がメリットを感じる構図が重要だと考えている。

以上